

## 巻頭

### 「勝利の秘訣はあきらめないこと」

金安 弘

#### はじめに

5月23日、「共謀罪」法案が衆議院で可決された。3分の2以上の国会議員たちが、国民のみならず、やがては自分たちの首を絞めつけられる恐怖を感じることなく通過させてしまった。この人々は、問題の重大性を理解して賛成をしたのだろうか。「国民の安全のために」というのであれば、せめて野党の理解が得られるまで議論を続けなければならなかった。「テロ対策のため」に一言で押し切った。日本の法律ではすでに「共謀」が15、陰謀が8、合計23の犯罪が、話し合う、準備するというだけで罪になってしまうという法体系ができています。何もしない人を逮捕することはできないが、重大な犯罪のみを例外とする建前が、この法案によって解体される。

真に解体されるのは、自由に話し合うこと、抗議すること、市民や労働者として連帯や団結、そして日本国憲法が保証してきた戦後社会の解体。安倍政権が推し進める秘密保護法、戦争法そして共謀罪、3点セットでまた一步「海外で戦争ができる国」に暴走することになる。

この大きな流れに抗し、食い止めるためにこそ私たち不戦ネットは活動をしてきました。沖縄は「あきらめない」が合言葉。端的に言えば「諦めさせること」こそが共謀罪の目的。「認識は悲観的に、行動はより明るく」。私たちのいつもの行動スタイルを守り続けていきたいと思います。

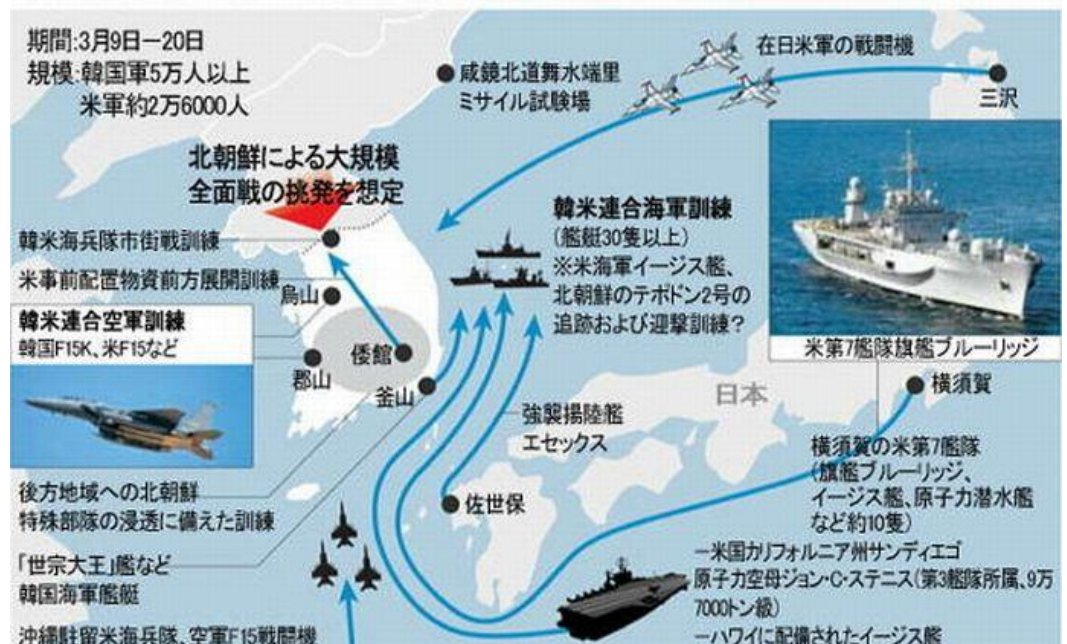
## 朝鮮、朝鮮、ああ朝鮮

この言葉がずっと好きでした。子どものころからです。朝鮮戦争を生き抜き、帰ってきたばあちゃんのかたまり「恩ある朝鮮」。今も耳にこびりついています。「その孫であるオレがその恩をいつか返さなければ。」と思い続けていましたが、まだ返していません。歴史認識がゆがむ日本の中で、「お前は何を考えているんだ」とよく言われ、「こいつとは二度と会うこともないな」とずっと思っ

て来ましたが、子どものころからゆがんだ意識の中で成長し、大人になれば、その意識が当たり前になるのは当然か、と近頃思えるようになりました。

子どもの頃から朝鮮が好きだった自分、朝鮮人に会ったこともないのに子どものころから朝鮮を嫌いだという日本人。3月から4月の2か月間、米韓大軍事演習（キーリゾルブ）、これだけでも共和国（朝鮮民主主義人民共和国）の経済は、毎年疲弊し続け、にもかかわらず自衛戦争の決意を引っ込めない。その決意を真正面から肯定できる日本人はもういないのか。10年前のある集会で、「私は祖国の核武装を支持します」と自分の敬愛する朝鮮人女性。同胞の人々から大きな信頼を得てきた彼女は。平

### 韓米連合「キーリゾルブ」および「フォールイーグル」演習概念図



和でなければアボジ、オモニたちの生活を守ることなどできないとも考えてきたはず。自分はいざというときどうするか。わかっているのは彼女を守る立場に立つだろう、ということです。今の情勢の中で言えることは、「金委員長、アメリカの軍事産業をこれ以上儲けさせないで。これ以上、安倍の軍事政策を助けしないで」ということです。北朝鮮への非難と不安の力学は、日本国内へ跳ね返り、地域社会へ溶け込み、隣人として生きる在日朝鮮人の心と生活を圧迫している。共謀罪の成立は、さらにこの圧迫を押し進める。断固として廃案にするために、この点からも反対の声を上げていきましょう。

## 外征軍化する自衛隊

今、「中国、北朝鮮の脅威論」を無視した「平和論」は成り立たない。脅威に対して、軍事力強化で対抗するのか、アメリカの「力による平和」政策から距離を取り、平和的外交努力に舵を取るのかの岐路に日本はある。憲法 9 条から見れば、力による対抗そのものが憲法違反だ。武力対抗が 9 条違反であることを基本に強く主張する必要がある、3 月 4 月の朝鮮半島情勢から要請されている。ペンス副大統領の「力による平和」政策を支持する安倍首相発言などもってのほかである。

この場合に、私たちは「個別的自衛権」問題を無視した議論はできない。専守防衛は、個別的自衛権によって憲法 9 条で認められる。これが安倍政権以前の内閣の立場だった。安倍首相は、集団的自衛権も 9 条違反にはならない。あげくの果てに 9 条に自衛隊を明記する発言を 5 月 3 日の憲法記念日にやってしまう。安倍の暴走を止めようという人々の中には個別的自衛権を認める人もいる。その人々との共闘と個別的自衛権を問う私たちの立場とを曖昧にすべきではない。共闘と個別的地位の関係をはっきり意識化しておく時にきていると強く感じる。それは、トランプ政権による米朝のさらなる緊張関係が生まれるとき、たとえ少数派になろうとも、9 条に従って言うべきこととは言う準備の過程であると考えています。

自衛隊をどう活用するのかの政府・防衛省のスピードは、私たちの想像をはるかに超えて進行し

ている。この状況の中で、軍事評論家の前田哲男氏は、月刊「世界」で 12 月号から 4 月号まで「自衛隊変貌」という連載を提起され、アメリカ軍の指揮下の中で外征軍化する自衛隊という論を展開されている。外征軍とは、海外で戦争をする軍隊のこと。どこの国の指揮下で戦争をするのか。軍事が政治の延長とするならば、自発的従属政治を進める安倍政治の方針で、自衛隊をアメリカ軍の指揮下＝従属化に置く政治を進める。私たちは、この政治をストップさせるためにも、この活動を委縮させる「共謀罪」法案の廃案を求めて行きましょう。

ジブチの基地をどのように活用するのか防衛相の検討が続く中、自衛隊に向けて、日本を守るはずの皆さんが、なぜ海外での軍事活動をせねばならないのかという問いかけをしつこく続けなければならない状況にある、と理解しています。基地への申し入れ、街宣活動、集会とデモ、どんな法案が成立しようともこの運動の基本は続けて行きます。皆様のご協力のほど、よろしくお願いいたします。

## 最後に

本が読めなくなるのは、仕事が終わると全身に疲れを感じるは、年には勝てない。次々とやってくる課題、放り出さずに引き受ける仲間を見ると、もう少し頑張ろうという気持ちになります。「勝利の秘訣はあきらめないこと」この沖縄の言葉、毎日唱えよう。

